



浄水場管理棟

馬ヶ城ダム

# 歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 **せと 歴史と文化財を知る見学会** 「秋の馬ヶ城」

主催：瀬戸市・(公財)瀬戸市文化振興財団

日時：令和6年11月30日(土)

見学コース： ①午前9時00分  
(予定時間) 9時05分

9時25分  
10時00分  
10時50分  
11時30分

②午後1時30分

1時35分  
1時55分  
2時30分  
3時20分  
4時00分

馬ヶ城浄水場集合

ろ過池で浄水施設の説明  
浄水場管理棟ほか近代化遺産建造物の説明  
馬ヶ城の森へ出発  
椿窯跡  
浄水場到着・解散

## 瀬戸市域の主な指定・登録文化財

本地大塚古墳(西本地町2丁目)

宮地古墳群(上之山町2丁目)

広久手30号窯跡  
木造十一面観音菩薩立像(下半田川町) 県  
木造阿弥陀如来立像(下半田川町) 県

古瀬戸瓶子(寺本町)

陶製狛犬(深川町) 国

瀬戸窯跡【小長曾窯跡】(東白坂町) 国  
永享年銘梵鐘  
聖徳太子絵伝(塩草町)

定光寺本堂(定光寺町) 国  
織田信長制札(窯町)  
菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]  
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(尻山町) 国  
源敬公廟(定光寺町) 国  
笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町)  
石造地藏菩薩立像(片草町)

陶質十六羅漢塑像(寺本町)  
六角陶碑(藤四郎町)  
旧山繁商店(仲切町・深川町) 国登  
瀬戸永泉教会礼拝堂建造(杉塚町) 国登  
陶製梵鐘(深川町)

近代  
(明治)  
(大正)  
(昭和)

## やきもの生産の変遷

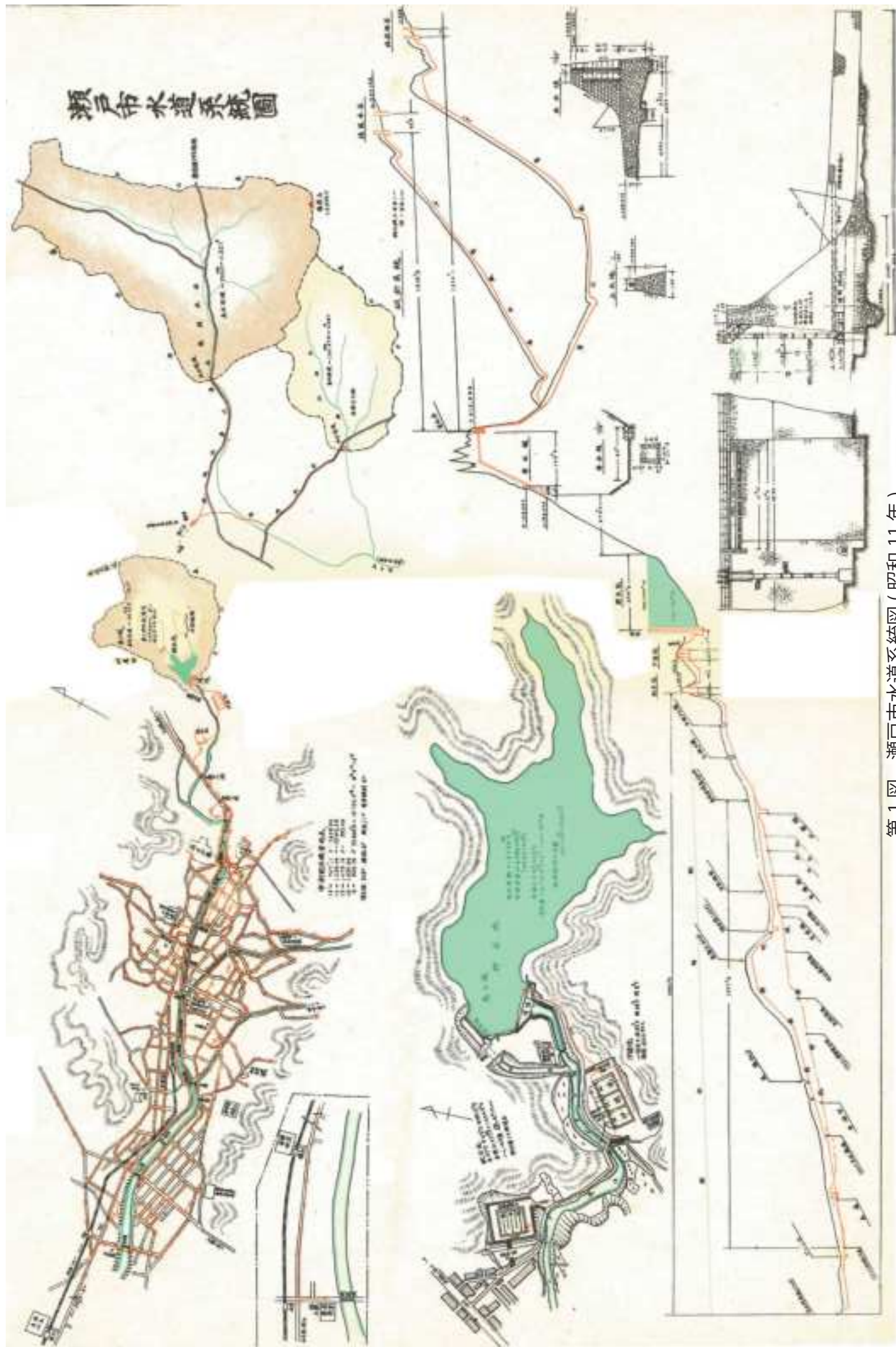
古墳	5世紀	飛鳥
	6世紀	
	7世紀	
	8世紀	
	9世紀	
	10世紀	
	11世紀	
	12世紀	
	13世紀	
	14世紀	
南北朝	15世紀	鎌倉
	16世紀	
戦国	17世紀	安土・桃山
	18世紀	
江戸	19世紀	
	20世紀	
	近代	

須恵器  
・  
灰釉陶器  
山茶碗  
・  
古瀬戸

大窯  
製品  
連房  
製品

## 今回見学する文化財とその関連年表

- 【①中世窯の馬ヶ城】  
椿窯操業(椿Ⅰ期) 大柘窯等操業(大柘Ⅰ期)  
大柘窯等操業(大柘Ⅱ期)
- 【②戦国城館の馬ヶ城】  
弘治2(1556)年 稲生合戦・桜川合戦  
(瀬戸城主加藤光泰と今村城主林吉之丞らが今村境にて合戦)  
天正12(1584)年 小牧・長久手の戦い(加藤忠景が岩崎城で討死)
- 【③近代化遺産の馬ヶ城】  
昭和4(1929)年 瀬戸市制施行  
昭和8(1933)年 馬ヶ城浄水場給水開始  
昭和11(1936)年 馬ヶ城第2期工事を完了



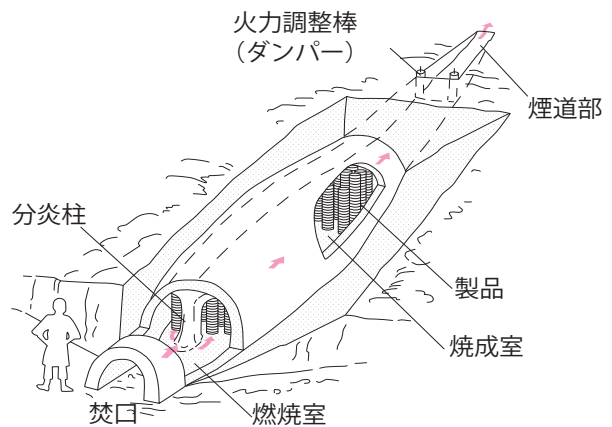
第1図 瀬戸市水道系統圖 (昭和11年)

うま がじょう かま あと  
**①馬ヶ城の窯跡**

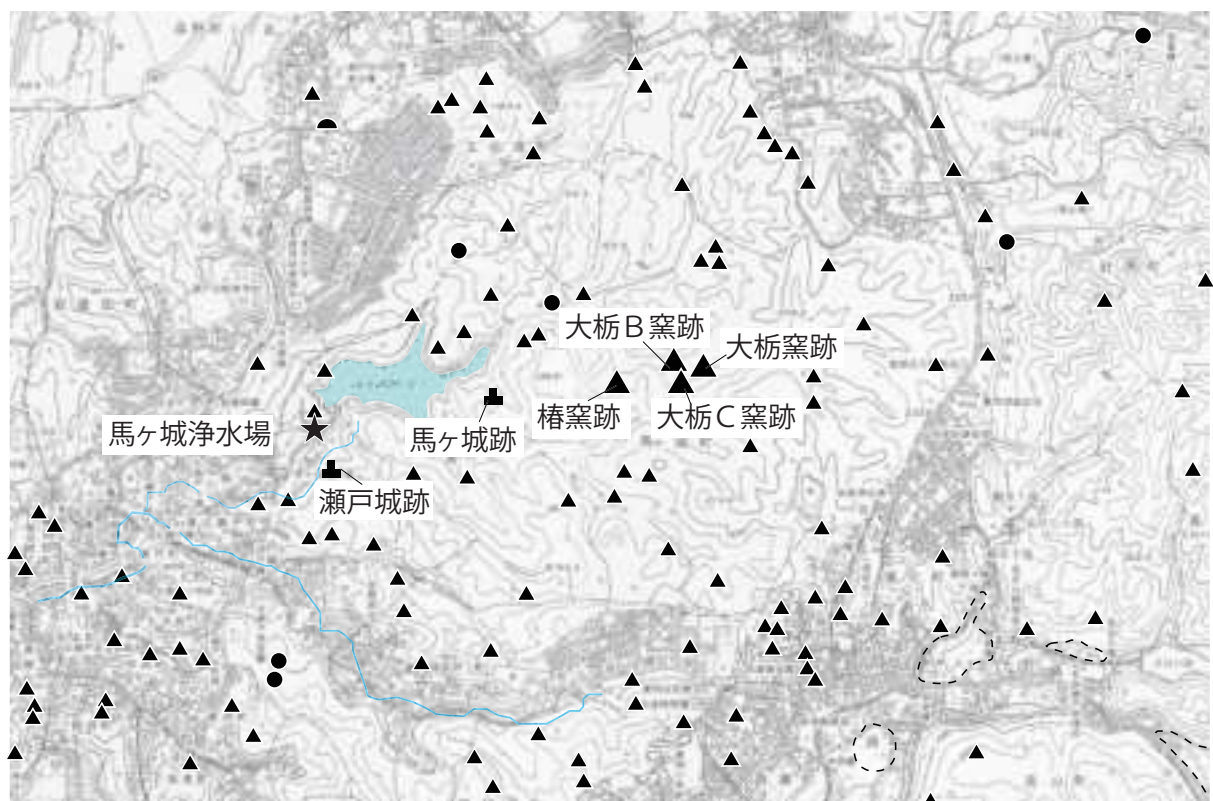
馬ヶ城浄水場の東側に広がる森の中には、かつて焼き物を生産した「窯跡」が、今もなお数多く残されています。これらは丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いた「窖窯（あながま）」と呼ばれるもので、瀬戸市域で初めて窯業生産が開始された平安時代中期から室町時代にかけて築かれ続けました。馬ヶ城の窯跡は、主に13世紀後半と14世紀後半～15世紀前半に操業しており、特に13世紀後半は、瀬戸市域の中でもこの馬ヶ城が窯業生産の中心であったことがわかっています。また、14世紀前半の窯跡がほとんど確認されていないのは、燃料（薪）となる周辺の木々が伐採し尽くされたため、生産の中心が東側赤津地区に移ったためと考えられています。その後、50年以上の時を経て森が再生し、再び窯が築かれるようになった結果、馬ヶ城では2つの時期の窯跡が残されたというわけです。

ここで生産された焼き物には、「山茶碗」と呼ばれる無釉の碗や皿、鉢の他、「古瀬戸」と呼ばれる器表面に釉薬が施されたものがみられ

ます。この「古瀬戸」は、中世の日本においては唯一の施釉陶器であり、特に13世紀から14世紀前半にかけては、そのほとんどが当時幕府のあった鎌倉へと運ばれていた高級品であったことが明らかにされています。この馬ヶ城の「古瀬戸」もおそらく例外ではなく、鎌倉で暮らす上級武士や町人向けに生産されていたと考えられます。



第2図 窖窯模式図



第3図 馬ヶ城地区周辺の遺跡 (1:20,000)



山茶碗 (13 世紀)



古瀬戸 (13 世紀)

つばきかま あと  
①-1 椿窯跡

椿窯跡は、浄水場管理事務所から約 700 m 東の森の中にあり、窯の名は周辺に椿の木々が生い茂っていたことから付けられたとされています。かつて、「椿のほりのて」という言葉がありました。「ほりのて」とは窯跡から出土した焼き物のことを指し、他の窯跡から出土した優品も「椿のほりのて」と称されるほど、この窯の名は広く知れ渡っていたようです。

さて、椿窯跡は昭和 40 年代に学術調査が行われ、4 基の窯体を確認したとの記録が残されていますが、その後、平成 14 年・15 年に改めて確認調査を行った結果、4 基のうち、1 基は製品を乾燥させるための施設であることがわかりました。その他、さらに工房と思われる平坦面、失敗した製品を捨てた灰原が良好に残されていることが確認されました。

調査で出土した製品は、13 世紀後半（椿Ⅰ期）と 15 世紀前半（椿Ⅱ期）に生産されたもので、馬ヶ城の特徴をよく表しています。これらを生産した窯体は、第 4 図で示したように東向き斜面に 2 基（1・3 号窯）、南向き斜面に 1 基（2 号窯）確認されていて、そのうち、2 号窯は最終的に後半期の製品を生産したことが明らかになりました。1・3 号窯の生産年代は明確にできませんでしたが、もしかしたら椿Ⅰ期に使用した窯体が 100 年後に再利用された可能性も考えられます。いずれにしても、本窯跡ではかつて製品の成形や施釉、焼成、搬出といった一連の作業が行われており、いわば、焼き物生産の一大コンビナートであったと考えられます。



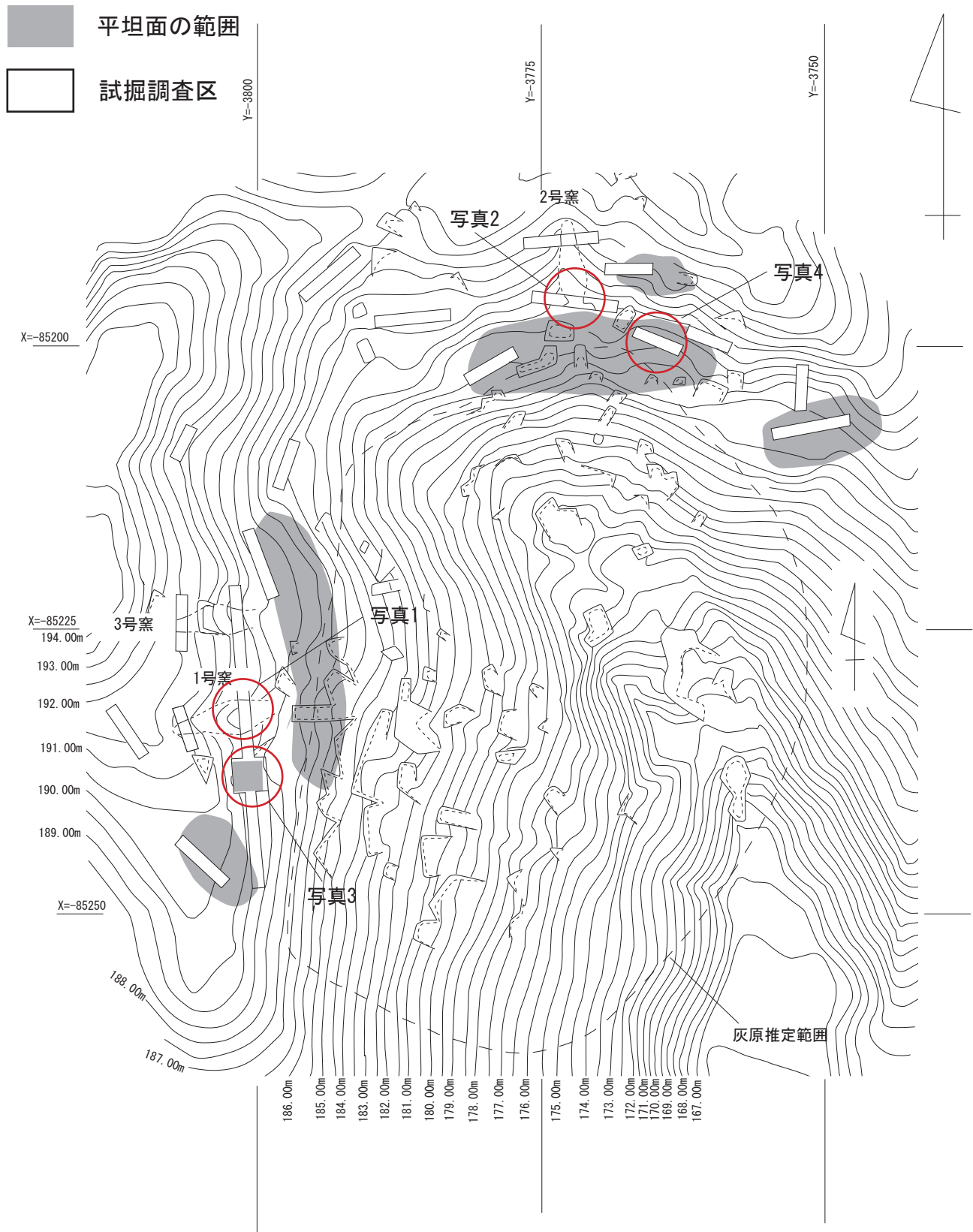
写真 1 椿 1 号窯跡検出状況

確認された椿 1 号窯跡の焼成室付近の写真です。黄色い破線が窯体の範囲で、天井は崩落していましたが、赤丸の部分に焚口と焼成室の境に構築される分炎柱の基部が残っていました。



写真 2 椿 2 号窯跡検出状況

写真は窯体の焚口部分で、ここから左上に向かって窯体が今も残っています。焚口の末端に石が積み上げられているのが確認されましたが、これは 15 世紀代の窰窯にしばしばみられる構築法です。



第4図 椿窯跡遺構配置図 (1:500)



写真3 製品の乾燥施設

椿窯跡の後半期に使用された施設で、同じ時代の窯跡ではよくみられる施設です。斜面の一部を削って平坦な床面を造りだし、そこに成形した製品を置いて乾燥させていました。床面は部分的に赤く焼けており(赤丸部分)、火を焚いていたことが窺えます。これは、冬場の気温が低い時、水分を含んだ製品が凍らないようにしていたためと考えられています。



写真4 ロクロ跡検出状況

窯跡の調査では、円形に粘土が溜まっている遺構がしばしば見られます。これはロクロピットと呼ばれる、ロクロを据えた穴の跡です。この穴が見つかった場所で、製品の成形が行われていました。円形の粘土の中心にはロクロの軸を差し込む小さな穴があり、写真のように焼き物をを伏せて置くことで、軸穴に土が溜まらないようにしていたと言われています。

お お とち かま あと  
① -2 大 柵 窯 跡

椿窯跡から尾根づたいにさらに200mほど東に進むと、尾根を挟んで南向き斜面に大柵窯跡が、北向き斜面に大柵B窯跡が、西向き斜面に大柵C窯跡があります。平成15年に確認調査が行われ、窯体などが良好に遺存していることがわかりました。

大柵窯跡では、同一斜面に3基の窯体が並んでいました。調査で出土した遺物は13世紀後半(大柵I期)と14世紀後半(大柵II期)に生産されたもので、椿窯跡同様、操業年代に空白期間があったことが明らかにされています。窯体の周辺には人工的に造られた平坦面が数か

所確認できました。それぞれの場所がどのように使われていたかは調査では明らかにできませんでしたが、やはり製品を成形したり乾燥させるための場所であったと考えられます。

この他、大柵B窯跡では明確な遺構は確認できませんでしたが、おそらく窯体は良好に遺存していると思われます。また、大柵C窯跡では、窯体を炭焼き窯に改造して使用していたことが明らかになっています。両窯とも遺物の出土量は多くありませんが、やはり操業は2つの時期に分かれていたと考えられます。

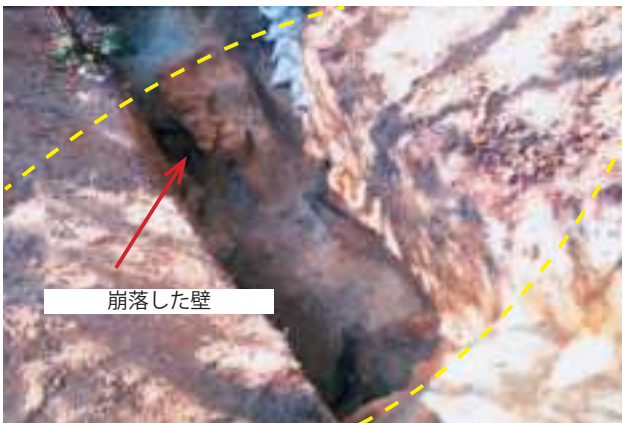


写真5 大柵2号窯跡検出状況

大柵2号窯跡の焼成室(製品を焼く部屋)の写真です。黄色い輪郭が窯体部分で、右側に向かって傾斜が上がっていきます。窯体の天井や側壁(矢印部分)は長い年月の間に崩落していました。

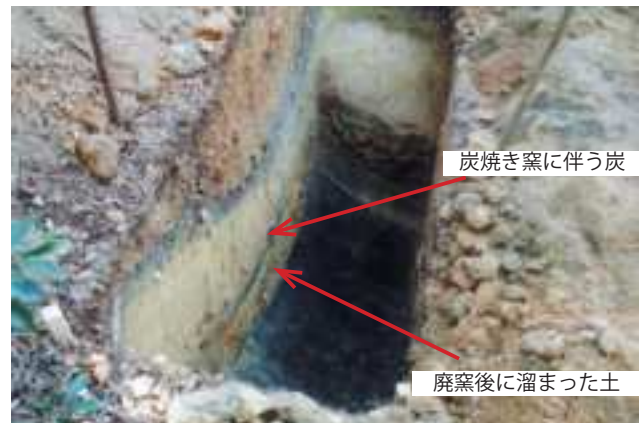
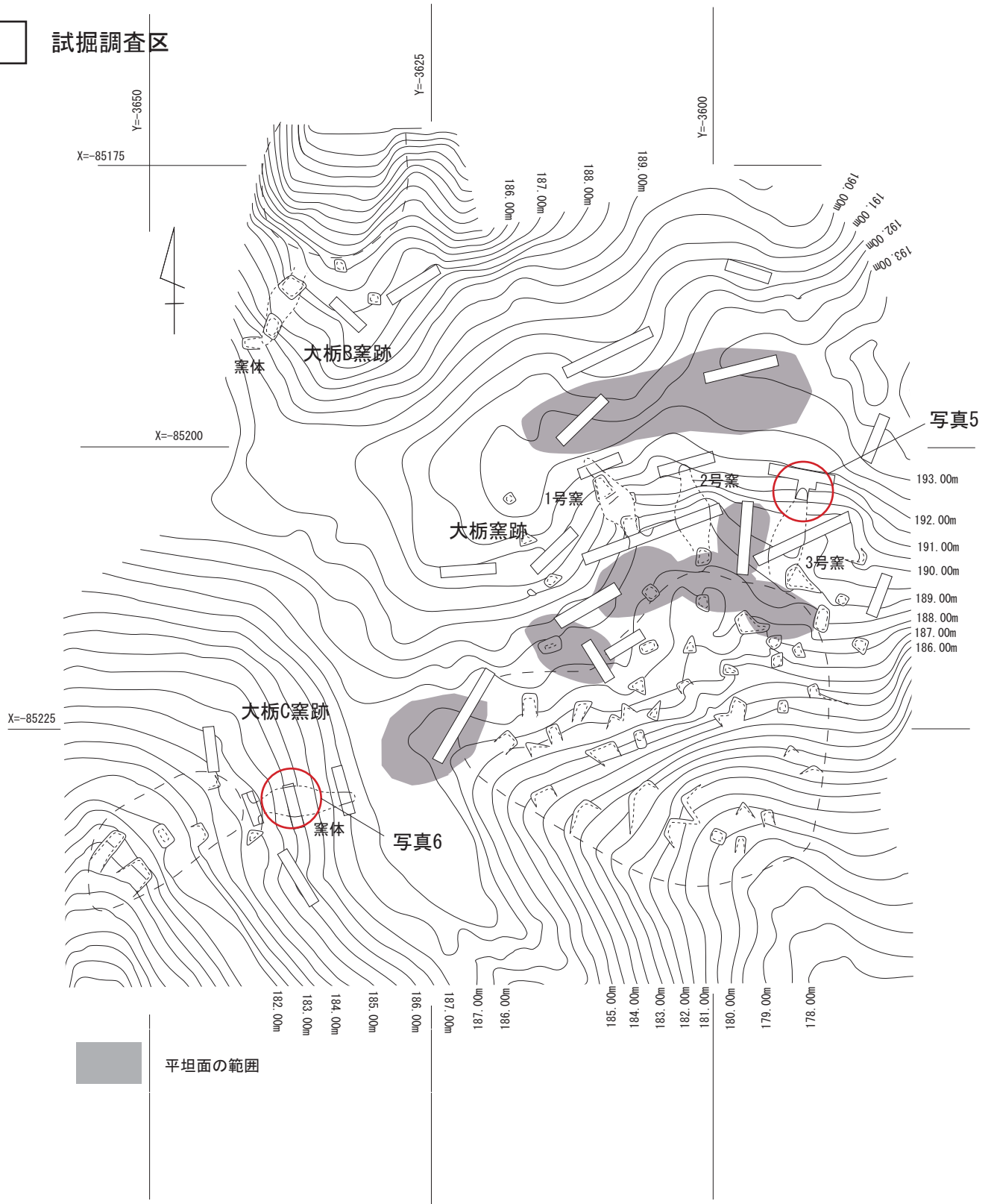


写真6 大柵C窯跡検出状況

窯体の焼成室を検出した写真です。床面の上に堆積した土のさらには上には炭層が厚く堆積していたことから、廃窯後に窯体を改造して炭焼き窯として使用したことがわかりました。

■ 平坦面の範囲  
 □ 試掘調査区



第5図 大柵窯跡遺構配置図 (1:500)



第6図 窠跡復元図



うま が じょう じょうかん あと  
②馬ヶ城の城館跡

うま が じょうあと  
②-1 馬ヶ城跡

貯水池堰堤の東側尾根上にあり、「太郎左池」という地名や土塁と思われる遺構が残っているとされますが、発掘調査等が行われていないため詳細については不明です。『風土』で滝本知二氏が城跡の郭として比定するのは、椿窯跡の南東側にあたり、長さ45mの土塁の内側にある南北約100m東西150mの平坦地がその地であるとしています。

築城は鎌倉時代まで遡るともいわれ、城主は代々加藤太郎左衛門を名乗ったと伝えられます。加藤氏は室町時代末ごろまでこの城に住んでいたものと考えられています。

天正12(1584)年の小牧・長久手の戦いの折、岩崎城(現日進市)の城主丹羽氏次の姉を妻に持つ加藤忠景が、豊臣方の池田亘輝・森長からの攻撃する岩崎城を守って討死したと伝えられています。加藤忠景は、当時織田信勝に仕えた武将で、天正12年に記された『古城主覚記』に「長久手古城、加藤太郎左衛門居城」と記されるように、長久手城主であった人物とされています。諱名は忠景または景常とも称し、代々太郎左衛門を襲名したと考えられています。

この加藤忠景こそが馬ヶ城の城主の末裔であり、戸田修二氏は弘治2(1556)年の攻防の際に馬ヶ城も攻め落とされて、加藤氏は長久手に落ちのび、斎藤平左衛門尉の長久手城を奪って居城することになったのではないかと考察しています。

【参考文献】

- 滝本知二 1956 「馬ヶ城発見」『風土 第2巻第10号』郷土史学研究会  
戸田修二 1966 「瀬戸古城史談」『瀬戸市史稿』  
戸田修二 1966 「馬が城」「瀬戸城」『日本城郭全集 7』(株)人物往来社  
山田柁之 1993 「瀬戸城」『史跡散策 愛知の城』

せ とじょうあと  
②-2 瀬戸城跡

瀬戸城は、鯨見(くじらみ)の城ともいわれ、南に今の拜戸川、北に古瀬戸川が天然の堀切となる丘陵上に存在していたと伝えられますが、明確な城館の遺構は確認されていません。

旧城構えは、東西65間(117m)、南北80間(144m)で、城主は加藤光泰、その父は加藤景泰と伝えられ、父子で織田信長に仕えたといえます。

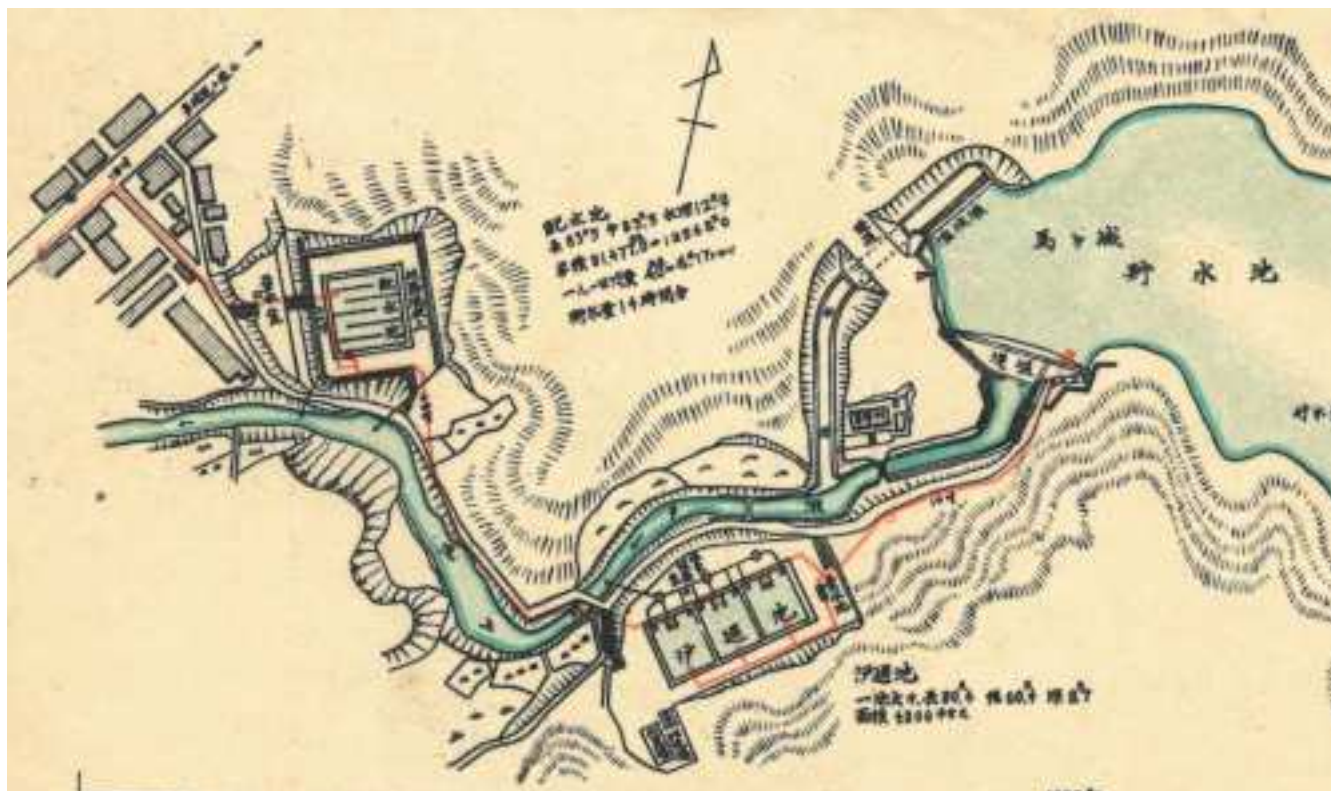
弘治2(1556)年の織田信長とその弟織田信行との家督争いから発展した稲生(いのう)合戦で、信行方の柴田勝家らが敗走する中、同方の今村城主の林吉之丞、狩宿城主の林信勝が今村に逃げ込みました。瀬戸城主であった加藤光泰は、水野一色城主の磯村左近清玉らとともに桜川(現在の陣屋川)東岸に陣を構え、林吉之丞・林信勝を迎え撃ったと伝えられます(桜川合戦)。

その後、加藤光泰は、本能寺の変(天正10(1582)年)後には豊臣秀吉に仕え、山崎合戦での功績から同11(1583)年に遠江国高島城主となり、同18(1590)年には甲斐国甲府城主、文禄4(1595)年の朝鮮出兵では彼地で死去したと伝えられています。

うま がじょう きんだい か い さん  
 ③馬ヶ城の近代化遺産  
 馬ヶ城浄水場



写真7 竣工(昭和8(1933)年)当時の馬ヶ城浄水場(フォトスタジオ伊里撮影)



第7図 浄水場平面図(2期工事竣工時(昭和11(1936)年))



写真8 貯水池堰堤から溢流する水の波紋

瀬戸市では、昭和4(1929)年の市制施行前後から、櫻町水道(馬ヶ城溪流を利用)・末広水道(一里塚川溪流を利用)などの簡易水道や、井戸水を汲み上げる宮前水道がありましたが、いずれも小規模なもので、市域の人口が増加する中で、住民の保健衛生や火災防備を担う水道施設としては不十分なものでした。このため、新たな上水道施設の建設が求められました。

馬ヶ城浄水場は、昭和6(1931)年に起工し、同8(1933)年12月16日に給水を開始しました。なお、起工直前に、当初予定されていた馬ヶ城と紺屋田の水源池のみでは狭小であり、補助水源として赤津地区の白坂(赤津川水源)・山路(山路川水源)からの給水も加える案が浮上し、赤津地区・幡山村ほかの住民から猛烈な反対運動が起きています。前述の昭和8年の給水開始は、そのような中で馬ヶ城水源のみの給水でした。それぞれの地区の反対運動に対し、水道供給を行ったり、山口堰堤設置を県に働きかけ(同8(1933)年12月竣工)市も工事費を負担するなど補償交渉を続け、ようやく昭和11(1936)年に現在供給されている本谷取水地(白坂)、西谷取水地(山路)の工事・運用開始を行えるようになりました。

国内の近代水道は明治20(1887)年に横浜で通水したのが最初で、外国人居留地や軍事施設への給水需要に応える都市で徐々に普及していききました。愛知県内の最初に建造された上水道施設は、陸軍専用水道として現在の豊橋市の高山浄水場で明治41(1908)年に完成しました。民生用の水道施設としては、大正3(1914)年完

成の名古屋市鍋屋上野浄水場が県下最初で、続いて豊橋市小鷹野浄水場、現半田市星崎浄水場(現在廃止)、岡崎市六供浄水場に続いて瀬戸市の馬ヶ城浄水場が建設されました。

馬ヶ城浄水場の貯水池は、全高16.6m全長54.45mの堰堤で貯水し、堰堤は割石混凝土(コンクリート)造りの重力コンクリートダムです。堰堤の中央部には溢流堰(いつりゅうせき)があり、ここから流れ落ちる水は、コンクリートダムでは珍しいレース状の鱗文様を描きます(写真8)。

貯水池より取水された水は、下流約160mにある量水池を經由し、隣のろ過池へ送られます。

ろ過池は、3つが連続し、隔壁仕切りで築造されており、一つのろ過池の面積は440㎡です。ろ過池では1日4~5mのゆっくりとした速度で水をろ過する「緩速ろ過」という方法で水をきれいにしています。

各ろ過池の北端には、ろ過した水を集める深さ3.27mのろ過井があり、その上に鉄筋コンクリート造りの観測小屋(ろ過井上屋)が建てられています。めくらアーチに片蓋柱を施したデザインで、他の同時期の浄水場施設にみられるような中世西洋建築風の様式でまとめられています。ろ過された水は消毒室を經由し、古瀬戸川対岸の配水池に送られ、自然流下により市街地に配水されます。

浄水場の管理棟は、ろ過池側から川を挟んでアーチ橋(写真9)で繋げられた対岸斜面の下方に、梁間4間×桁行7間の洋館意匠の建造物が建てられています。屋根は半切妻(ドイツ破風)、鉄板葺きで、正面3ヶ所のマンサード様(半折れ屋根)のドーマーウインドウが屋根面のアクセントとなっています。妻側のまばらな垂木には金属製の持ち送りが付けられています。

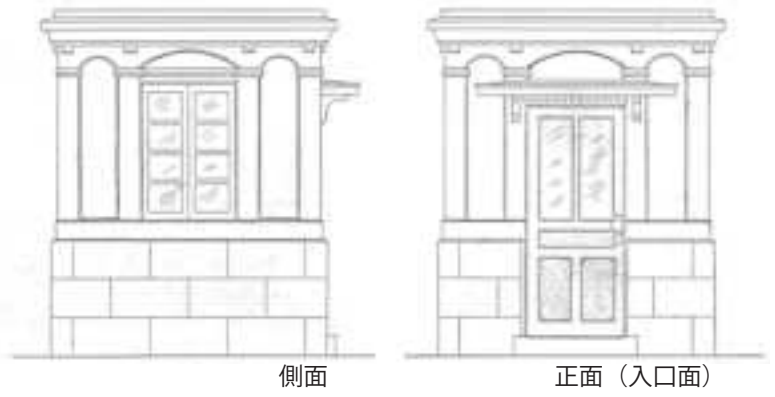
管理棟の外壁はドイツ下見張りで、腰壁は縦板張り目地棒押えとしています。エントランスの土間の左右の中木にスクラッチタイル(写真11)を貼るなど昭和初期の建築の要素が垣間みられ、瀟洒な洋館の意匠でまとめられた趣のある歴史的建造物といえます。



写真9 管理棟前のアーチ橋



写真10 緩速ろ過池と観測小屋



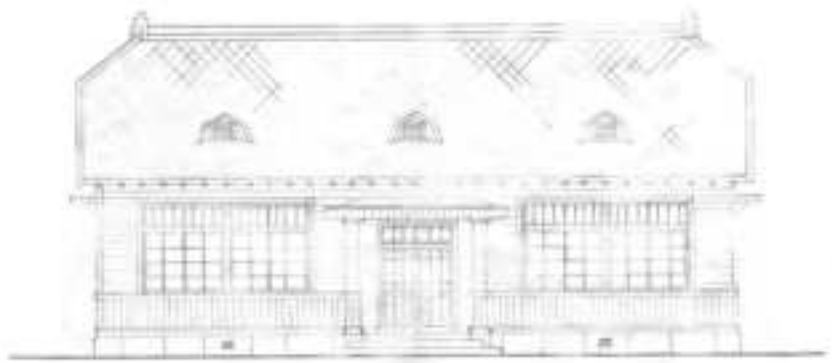
側面

正面（入口面）

第8図 ろ過池 観測小屋（ろ過井上屋）竣工図（1:60）  
（昭和8（1933）年）



側面（西側）



正面（南側）



写真11 正面の現況



平面図

第9図 管理棟竣工図（昭和8（1933）年）（1:180）



写真12 玄関土間側面の巾木  
に貼られたスクラッチタイル



写真13 玄関脇の柱と玄関庇  
の間につけられた持ち送り



写真14 東側面の状況

# 馬ヶ城の自然

2024 1130 上杉 毅

1. **所在地** 愛知県瀬戸市  
五位塚町および馬ヶ城町、東古瀬戸町  
西拝戸町 東拝戸町、赤津町、針原町

2. **面積** 約180ha

3. **標高** 最低点 浄水場137.4m  
最高点 針原町との境 瀬戸環状線上  
229m

4. **河川** すべて東から西へ流れる  
北部 五位塚町内 五位塚川 約20ha  
中部 馬ヶ城町内 古瀬戸川 約140ha  
南部 馬ヶ城町内 北拝戸川 約20ha

5. **湖沼**  
馬ヶ城貯水池 約4ha  
上の池 約1.3ha  
陶土採掘跡 0.25ha  
ミズゴケの池 0.04ha

6. **湿地**  
湿潤な二次林、高い沢の密度、湿地(59箇所) 維管束植物425種

東海丘陵要素植物群  
東海地方の湧水湿地にのみ自生する植物

環境省「重要湿地500」の301のひとつとして選定(海上の森や東谷山の湿地群と同じカテゴリー)



三田、水下の内には池がある



## 7. 湿地の植物

シデコブシ(*Magnolia stellata* Siebold & Zucc. Maxim.,1872)、

モクレン科樹木。東海地方にのみ自生。馬ヶ城では湿地のみでなく池の周囲、沢筋などに広く生育。県の絶滅危惧Ⅱ類（国:準絶滅危惧）馬ヶ城では1997年に2402株あった。2013年には59か所の湿地のうち51か所で確認されたが、個体数は激減している。



カザグルマ(*Clematis patens* C.Morren et Decne.)、

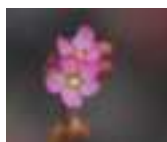
つる性の多年草。東アジアに分布。クレマチスの原種のひとつ。県の絶滅危惧ⅠB類・国:準絶滅危惧。

馬ヶ城では59か所の湿地のうち16か所で確認。



トウカイコモウセンゴケ(*Drosera tokaiensis* (Komiya et C.Shibata) T.Nakam. et K.Ueda) 東海地方の固有。食虫植物。葉はシャモジ型。(モウセンゴケはスプーン型) コモウセンゴケとモウセンゴケの雑種から発生した独立種。馬ヶ城ではモウセンゴケとあわせて10か所の湿地で自生している。

関西以西にも分布した可能性はあるが、標本が少なく、自生地も消滅した可能性がある



クロミノニシゴリ (*Symplocos paniculata* (Thunb.) Miq.) ハイノキ科樹木

東海、近畿に自生。シロサワフタギともいう(ニシゴリはサワフタギのこと) 葉はサワフタギに酷似するが、表面の手触りはなめらかで、ごわごわとした手触りのサワフタギとは明らかに区別できる。馬ヶ城では16箇所の湿地で自生している。





サギソウ(*Pecteilis radiata* (Thunb.) Raf.)、ラン科の草本  
 県の絶滅危惧Ⅱ類 国:準絶滅危惧。

100株レベルの湿地が2箇所ある。馬ヶ城では3箇所を確認されている。山野草ブームのころ乱獲されて自生地が減少した。植生遷移により湿地そのものが消えつつある。ヘビノボラズ(*Berberis sieboldii* Miq.)、中部、近畿、宮崎県に分布。馬ヶ城では4月下旬に開花。鋭いとげがあり、ヘビも登れないことから命名。17/59箇所



## 8. 自然の移り変わり

馬ヶ城周辺は薪炭林として伐採されるたびに切り株から発芽したり、種子から発芽したりして森が回復していたが、収奪が過酷で最後にはげ山に戻っていた。1933以降は水源涵養指定林としてはげ山から森林への回復が進む

古墳時代～鎌倉室町以前の花粉分析からは豊かな植生が伺える

「常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属や針葉樹のマツ属複維管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科を主とした森林」「ツブラジイ、スギ、クマシデ属、アサダ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、カエデ属」(上品野蟹川遺跡 1998 同Ⅱ 1999財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター)



馬ヶ城貯水池完成時『古瀬戸・洞四方山話』より転





椿窯のシイ林

ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata*) ブナ科木本

1cm ほどの小さなドングリを实らせる。巨木に育ち、植生遷移の最後に優占する。馬ヶ城はかつて大部分がはげ山だったが、シイの大木や菌従属栄養植物が発生するほどになっている。椿窯付近の植生はひととき古い。

幹囲258cm(2014)→283cm(2024)

シイのほかマツやコナラなど森の主たる樹種の多くは菌類(キノコ)と共生し、栄養を融通しあうことで成長する。馬ヶ城にはそのような働きをするキノコが多い。



コテングタケモドキ



ドクツルタケ



ベニタケ



アカヤマドリ

左の4種のキノコはどれも植物との間に外生菌根という組織を形成して栄養をやりとりしている。



菌従属栄養植物の生態

千葉大学 大和 政秀研究室 HP より引用

### 9. さまざまな菌従属栄養植物

森が深くなるにつれて葉緑体をもたず光合成をしない植物が現れる。キノコの菌糸から栄養を受け取って発芽、成長、結実を行う。馬ヶ城にはアキノギンリョウソウ、ホクリクムヨウラン、キムヨウラン、エンシュウムヨウランなどもある。



ホクリクムヨウラン



キムヨウラン



エンシュウムヨウラン

樹木で光合成によって取り込まれた炭素が菌糸を通過してキノコに移動し(分け与えられ)、キノコからさらに菌従属栄養植物に移動している。樹木とキノコとの共生関係の上にタダ乗りして一方的に利益を得ているとされる。





↑ヒナノシヤクジョウ ホンゴウソウ↑

菌従属栄養植物であるヒナノシヤクジョウとホンゴウソウはよく近い位置で発見される。同一の菌類に寄生していると考えられる。



イヌタヌキモ

## 10. 水系の生物

貯水池にはイヌタヌキモやイトタヌキモなど食虫植物が見られる。イトタヌキモは瀬戸市で絶滅したとされていたが、2022年に再発見された。

鳥類では冬季にはオシドリが多数休んでいるほか、オオタカの巣と思われるものが見られる。



オシドリ



オオタカの巣



オオタカ(wiki)

## 11. 特異な変形菌相

変形菌は胞子を形成するアメーバで、瀬戸市はその極めて特異な生育地であることが明らかになりつつある。馬ヶ城もそのひとつで、2022年のせと歴ではツツスワリホコリの子実体が確認されているほか、クダマキフクロホコリやミドリフクロホコリなど希少種が出現する。



ツツスワリホコリ



ツツスワリホコリの拡大



ミドリフクロホコリ

ツツスワリホコリの子実体は特に多く、瀬戸周辺で2019年以降に12000か所以上で記録されている。発生の予報も可能で、2024年には3回の発生を予報した。発生時には白い変形体が林床を覆い、足の踏み場もないほどになる。



クダマキフクロホコリ

## 12.野生動物の増加

馬ヶ城にはイノシシ・シカ・ニホンカモシカ・タヌキ・キツネ・アライグマなど、大型中型の哺乳動物が撮影されている。



イノシシ 若い成獣



ぬた場



猪の木



ニホンカモシカ



ニホンカモシカの糞



キツネ



ニホンジカ(ねむの森)



ニホンジカの食痕

明治以降、鉄砲による狩猟が解禁されると、多くの野生動物は狩られて絶滅したり激減したりした。馬ヶ城は都市近郊にあるが、広大な自然林で人もいないため、多くの動物が安心して暮らせる環境である。近年は徐々に個体数が増加しているだけでなく、アライグマやハクビシンなど外来種も入り込んでいる。またツキノワグマは隣接する赤津で確認されている。



アライグマ(特定外来種)



タヌキ

馬ヶ城は迷いやすい場所です。  
はぐれることのないようについてきてください



当日の散策ルート (予定)

## 瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～1000年以上の歴史を誇るせとものまち 陶都瀬戸～」を開設しました。

これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：<http://seto-guide.jp/>



主催：瀬戸市・(公財)瀬戸市文化振興財団